

コラボレーションで創造力を高めよう。

『流通・通』の連載を担当して2年を過ぎようとしている。この間、中央では「景気回復の兆しが見え始めた」という発言も聞かれるが、地域経済の実感「回復の兆し」とはほど遠い印象をぬぐえない。各企業は創意工夫に努めているものの、自助努力だけでは越えられない壁もあり、異業種・同業種を問わず、コラボレーション(協働)することも必要だ。そこで今回は、さまざまなコラボレーションの事例を紹介しよう。

“景色”とコラボレーション!

「借景」という言葉をご存知かと思う。自然の風景や街並みを背景として生かしながら、庭づくりや景観づくりをすすめる手法のことだが、この借景をアートの世界で活用している美術館がある。神奈川県箱根町にある箱根芦ノ湖美術館である。建物自体も富士山を望む芦ノ湖畔に建ち、借景を生かした見事な設計だが、圧巻は3階の踊り場に飾られた一枚の“作品”である。四季折々に彩りを変える芦ノ湖と富士山。鑑賞する時々、天候や湿度によって変わる風情。観る角度によって変幻自在に構図を変えるデザイン。その“作品”の名は「ピクチャーウインドウ」、そう窓なのである。美術館の3階から眺める風景を“作品”として展示しているのである。

しかし、ただの窓ではない。窓枠には中世の絵画を思わせる木製の額縁が飾られ、かたわらにはゆっくりと鑑賞できるようにベンチまで置かれている。近代絵画の巨匠ピカソやシャガールといった展示作品にも劣らない、遠方から訪れた人々の心を和ませてくれる見事な“作品”。こうしたアイディアは、都市部でも生かせそうだ。最近ではホテルの高層階から眺める夜景などが人気を集めているが、景色を“作品”として楽しませる味つけをすれば、今までの見慣れた風景が新鮮な感動を与えることも期待でき

るのである。

“面影”とコラボレーション!

街の再開発にあたり、かつての景観を生かしつつ新しい手法で街づくりを進めたのが、昨年秋にオープンした大阪市浪速区の『なんばパークス』だ。なんばパークスは、かつての大阪球場跡を活用して開発された複合商業施設。球場閉鎖後、住宅展示場として利用されていた跡地を「人と都市と自然の共生」を基本テーマに開発したもので、地上30階のオフィスタワーと、ブランドショップや輸入雑貨、飲食店などが入居するパークスガーデンが整備されている。

なかでもユニークなのが、パークスガーデンだ。8階から1階まででかなりの丘陵状になっていて、235種・約4万株の花と緑が植えられている。その合間をなぞるように散策路が整備されていて、都市の真ん中にありながら鮮やかな緑と色とりどりの美しい花にふれることができる。しかし、ここで見逃してはならないのは都市空間に自然を持ち込んだコンセプトだけではない。現地をご覧いただければ気づくことだが、実はこの丘陵状の建物は、かつて野球場だった街の趣を生かしたものである。とりわけ外形は大きなカーブを描いていて、大阪球場の面影を感じる。いま企業の再生がキーワードになっているが、再生で最も大事なことは



企業のコンセプトを原点に立ち戻って見つめなおすこと。なんばパークスには、地域の人たちに支え、愛されてきた大阪球場の歴史が生かされているのである。

“遺産”とコラボレーション!

最後に、古い温泉街の身近な話題をひとつ。群馬県伊香保町の温泉街では、大晦日に行われている伝統行事・伊香保姫行列の資金を集めるため、繭玉のおかめ面と厄除けの輪をあしらった「伊香保姫の木札」を作ったところ、予想以上の反響があり、温泉街の人気商品になっているという。

この木札、地元榛名湖に伝わる伊香保姫の伝説にちなみ企画されたもので、450個を製作し、旅館などに振り分けたところほとんどを完売。温泉街の新たな土産品にと期待する声ができるほど、人気を集めた。素材の繭玉と杉材はいずれも群馬県産で、かつて養蚕業が盛んだった群馬県の特徴を生かしたのだという。企画した団体では木札の売上げで行列に使う面を追加購入し、宿泊客にも参加を呼びかけたとか。地域の残るソフトとハードを組み合わせ、お客をも巻き込む仕掛けをつくる。さまざまな素材をコラボレートさせることで、新たな活力を生み出そうとしている。

(公)